

エンデュランス・スポーツの実践感覚に関する一考察 広島県西部のトライアスリートの事例から

○浜田雄介〔広島市立大学大学院〕 迫俊道〔大阪商業大学〕 服部宏治〔広島国際大学〕

トライアスロンやマラソンなどといった持久力を競うエンデュランス・スポーツは、余暇活動として現在多くの人々に親しまれるようになってきている。エンデュランス・スポーツを取り扱ったこれまでの社会学的研究は、長時間にわたる身体的苦痛とその克服による自己肯定感を、人々が競技に取り組む大きな意義の1つとして論じてきた。それは個々の目的や能力に応じて設定された困難に挑戦することと、それを乗り越える経験にもとづくフィードバックという、チクセントミハイのフロー理論の知見に準えてみるができる。

しかしながら、実際に競技を始め、またどのように目標を設定していくのかといった実践の継続的な過程と、実際の競技のなかで感得される肯定的なフィードバックとの関連は、十分に議論されてきたとはいえない。そこで、本報告ではおもに広島県西部で活動するトライアスリート（トライアスロン競技者）を対象に実施した1対1での聞き取り調査の結果をもとに、チクセントミハイの述べるフロー体験の構成要素との対照から、どのようにしてトライアスリートが意義ある実践として競技に取り組み続けることができるのかを考察することを目的とした。

なお、調査結果や考察については発表当日に詳しく報告する予定である。

「住育」が生み出す地域主体の連鎖による、こちよ環境（まち）づくり

○藤井 廣男〔株式会社チームネット〕 △甲斐 徹郎〔株式会社チームネット代表〕

ヒートアイランド現象に代表される「環境問題」と、ひきこもり、独居老人問題などの「コミュニティ問題」とは、これまで別の分野として扱われ、それぞれを結びつけて議論されることはあまりなかった。切迫した現代の都市問題を解決するためには、「環境」と「コミュニティ」とを、同一の次元で捉えることが重要である。その背景には、技術発展により地域や外環境に依存しなくても、スイッチひとつで便利な暮らしを実現できるライフスタイルの確立がある。環境共生住宅の重要性が指摘されて久しくなるが、エネルギー問題だけでなく、分断されたライフスタイルから、環境とつながることの贅沢さを住まい手が認識し、それらを暮らしの中で使いこなし、享受するライフスタイルへの変容が都市問題を解決する突破口であると考えられる。弊社では、建物としての環境共生提案を行うだけでなく、入居直後の住まい手に対し、その住みこなし方を通して、外環境を暮らしに活かすサポート（住育）を行っている。身体的な快適性を実現することを目的とし、緑を活かして住まい・環境との「つながりの価値」を複数の住まい手間で体感・共有し、環境を軸としたコミュニティ形成を促すプログラムとなっている。このサポートを通して、入居時に環境意識が低い住まい手でも、緑を活かした暮らしの主体へと意識が変容している。身近な「住まい」をきっかけとして、個々のライフスタイルの変容が連鎖することで、自己増殖的な心地よい環境（まち）の実現こそが持続可能な次世代の姿であろう。本報では、これまで行なってきたサポート（住育）による成果事例を報告する。